

---

# おばあさんとチロ

抹茶小豆

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

おばあさんとチロ

### 【Nコード】

N5904P

### 【作者名】

抹茶小豆

### 【あらすじ】

ある冬の寒い日に、片手と片足が不自由になったおばあさんが施設に入所します。

しかし時が経つにつれて、誰も家族は面会に来てくれなくなりました。

寂しさに耐えかねたおばあさんはやがて死を願います。

しかしそんなある日、おばあさんは仔犬のチロと出会います。

## 前篇

それは粉雪の舞うとても寒い日でした。

おばあさんが介護タクシーから車椅子で、降りてきました。しょんぼりと下を向いて、一生懸命に涙を堪えています。

「もう、そんな顔をしないでよ。お母さんたら」

娘に車椅子を押してもらいながら、おばあさんはぷいと顔を背けました。

「施設なんて、姨捨山と一緒にだわ。お腹を痛めて産んで、一所懸命に愛情を注いでここまで大きく育てたのに、その恩義も忘れて、私の身体が不自由になった途端に、こんなところで暮せだなんて」

「そんな。お母さん。私たちだってお母さんを施設に預けるのは心苦しく思っているわ。だけど、私もお姉さんも家庭も仕事もあつてとてもじゃないけどお母さんの面倒なんて看られない。考えた末の苦渋の決断なんだから理解してよ」

娘は車椅子を押しながら溜息を吐きました。

「家に……家に帰りたい。お父さんと二人で苦労して買ったあの家に。あれは私のもんだ。あんたらにとやかく言われずに、あの家でお父さんの思い出を抱いて、静かに余生を過ごしたいんだよ」

「なに言ってるのよ。お母さん。そんな体で一人暮らしなんて無理よ」

おばあさんは脳梗塞という病気になって、右手と右足が麻痺して動かないのです。

「何が無理なもんか。私一人じゃ無理でも、今は国の補助なんかも

手厚く受けれるのだから、ホームヘルパーさんに来てもらえばいいじゃないか。そうすりゃ、一人ででも、ちゃあんと暮らしていける」  
「そんなこと言ったって、何かあったらどうするのよ。第一そんな身体のお母さんを一人で暮らせるなんて、近所の人になんて言われるか。世間体も考えてよね。とにかくあの家はもう処分して、お母さんはここで何不自由なく暮らして貰いますからね。お母さんは姨捨山なんていうけど、そんなに悪い所じゃないわ。趣味の園芸サークルや、書道サークル、お母さんの大好きな手芸サークルもあるのよ」

娘は年老いた母親を慰めようと、なるべく明るい声で話しをしますが、おばあさんはやっぱり肩をしょんぼりと落として、動かなくなつた自分の右手を悲しそうに見つめました。

おばあさんの持ち物は衣装箆笥と小さなクローゼットに入る分だけでした。

病院からの異動で疲れてしまったおばあさんは、ベッドに身を横たえました。

清潔なベッドは、なんだか冷たい感じがしました。

「じゃあね。私もお姉さんもできるだけお母さんの顔を見に来るようにしますからね」

頭から布団を被つたおばあさんの耳元で、娘が元気づける様にそういいました。

娘が去っていく廊下を、いつまでもいつまでもおばあさんが見つめています。

やがて角をまがり姿が見えなくなると、寂しさにおばあさんの胸が詰まります。

家族のアルバムを胸に抱いて、誰にも聞かれないように布団の中で

咽び泣きました。

「佐々木さん、今夜も泣いているわね」

宿直スタッフの大谷さんが、そつと同僚の木田さんに呟きます。

「なんとか、佐々木さんも元気になって欲しいわよね」

と木田さんも思案の様子です。

やがてぽんと手を打って、顔を輝かせます。

「そうだわ。お楽しみ会をやりましょう。そうすれば家族と離れて暮らす寂しさも紛れて、この施設の皆とも仲良くなれると思うの」

「それはいいわ。きっと佐々木さんも喜んでくれるわ」

大谷さんも、嬉しそうに微笑みます。

そしてお楽しみ会の日がやってきました。

紙のお皿に可愛くお菓子が盛られています。

ポッキーやかっぱえびせん、チョコレートもあります。

「あら、佐々木さん。お菓子食べないんですか？」

「ああ、これはね。孫が私に会いに来てくれたときに、食べさせてやるんじゃ」

そうつっておばあさんはそのお菓子をティッシュに包んでこっそりと自分のポケットに忍ばせます。

そして心に孫の喜ぶ顔を思い描いて、おばあさんは嬉しくなりました。

窓の外に広がる鉛色の景色を見つめ、おばあさんは来る日も来る日

も家族が来るのを待ち続けました。

しかし昔はおばあちゃん大好きといって、膝の上で遊んだ孫たちも受験だ部活だといって、おばあちゃんのもとへ訪ねてくることはほとんどありませんでした。

孫にあげようとつておいた、お菓子もすっかりと湿気てしまいました。

「これではもう、孫を喜ばせることはできんな」

おばあさんは、湿気たかつぱえびせんを口に放り込みました。かつぱえびせんはなんだか涙の味がしました。

それでもおばあさんは家族が自分に会いに来てくれるのを待ち続けました。

「明日はクリスマスじゃから、きつと会いに来てくれる」

そう自分に言い聞かせてずっとずっと、首を長くして家族を待ち続けました。

しかしとうとうクリスマス・イブにもクリスマスにも、おばあさんに誰も会いに来てはくれませんでした。

おばあさんの布団は涙で、しつとりと濡れていました。

そしておばあさんは神様に祈りました。

「神様。どうか私の命を召してください。愛する夫に先立たれ、身体の不自由になった私は娘たちのお荷物です。他人に迷惑がられてまで生きようとは思いません。どうか私を哀れだと思つなら、命を召してください」

それは悲しい悲しい祈りでした。

おばあさんは車椅子に座つて、ゆつくりと窓際に進みました。昨夜から降り続いた雪が音もなく静かに降り積もっています。おばあさんの脳裏に死が過りました。

施設の前から続く緩い坂道を下って、この雪の中に倒れたなら、もう自分では起き上がることができないだろう。  
この寒さだ。

私はきつと眠るように死ぬことができる。

そう思った時でした。

「くうん」

何か音がします。

「キューン……キューン」

それは、頼りない仔犬の鳴き声でした。

おばあさんははつとして目を凝らすと、頼りない街灯の明かりの下に小さな段ボールが置いてあります。

そこから、白い仔犬が頭を出して悲し気に鳴いているのです。

そして段々とその声は弱々しく、掠れて途切れていきます。

「大変。あんなに小さいのだから。朝まで放っておけば死んでしま  
うわ」

おばあさんは車椅子を左手で押して、宿直室に駆け込みました。

「お願い。助けて頂戴。施設の前に仔犬が捨てられているのだけれ  
ど、このままだったらあの子死んでしまう」

宿直室で仮眠をとっていた大谷さんが、上着を着て街灯の下に走っ  
ていきました。

上着の中に仔犬を抱えて戻ってくると、大谷さんは仔犬をおばあさ  
んに手渡しました。

「大丈夫ですよ。ちゃんと元気です。私ちょっと牛乳を温めてきま  
すから、その間佐々木さん、この子を抱いていて貰えませんか？」

仔犬はあばあさんの手の中で、ぶるぶると震えていました。

寒くて怖くて仕方なかったのです。

「大丈夫だよ。恐くないよ」

そう言つて、おばあさんは何度も仔犬を撫でました。  
すると仔犬も甘える様に鼻を鳴らします。

「くーん」

おばあさんの掌が優しくて、暖かくて、仔犬はとても気持ちがよかつたのです。

「ここに……命がある」

そう呟くとおばあさんの瞳に涙があふれて止まらなくなりました。

「生きることが嫌になつて、自分でその命を投げ出そうとして、だけれどしたら、こうして新たな命を拾つてしまつたなんて。これじゃあ、あべこべだね」

おばあさんは笑いました。泣きながらなんだか可笑しくなつて、笑つてしまいました。

「そうだ。だったら私がお前のお母さんになつてあげよう。小さくて頼りないお前を守るために、わたしもがんばるよ」



## 後編

おばあさんは仔犬をチ口と名付けました。

小さくてチ口チ口と鳴る鈴のように可愛かったからです。

大谷さんが温めてくれたミルクをお腹いっぱい飲んで、いつの間にかチ口はうとうとと眠ってしまいました。

大谷さんが段ボールを持ってきて、その中に清潔なタオルを敷き詰めてチ口を寝かせました。

おばあさんと大谷さんはそんなチ口の様子を嬉しそうに見つめています。

先ほどまで冷たく凍えていたおばあさんの心に、ぼつと明かりが灯りました。

次の日からおばあさんは変わりました。

ずっと嫌がっていたリハビリも一生懸命にがんばります。

片手ではできないと、諦めていた編み物にチャレンジしました。

おばあさんはチ口が寒い思いをしないように、チ口に腹巻を編んであげようと思ったのです。

毛糸を肩で挟んで、不器用な左手を一生懸命に動かします。

しかし何度も何度もかぎ針を床に落としてしまいます。

「大丈夫？ 佐々木さん」

おばあさんがあんまり一生懸命なので、疲れてしまわないかとヘルパーの木田さんも心配そうに見ています。

「私は大丈夫だよ。それよりチ口が寒い思いをしないように、はやくこれを編みあげてやりたいんだ」

そう言っておばあさんは、一生懸命にかぎ針を動かします。

小さなチ口が施設にやってきてから、みんなの様子が変わりました。みんなチ口のために何かをしてあげようと一生懸命に奮闘していま

す。

源さんはチ口に小屋を作ってやろうとねじり鉢巻きを額に巻いています。

しかし源さんは手が不自由で、思うように動きません。

施設の職員さんに手伝ってもらってようやく出来た小屋の屋根に、ペンキで色を塗っているのですが、あちこちペンキがはみ出してとても不格好です。

それでもどんな犬小屋よりも心がこもっていて暖かい気持ちになります。

「おや、チ口。こっちにおいで」

そういつて手を差し出すと、チ口は小さな尻尾をふりふりこちらにやってきます。

そのさまがとても愛らしいので、チ口はすっかり施設の人気者になりました。

そしてチ口も、施設の皆のことが大好きでした。

皆にたくさんたくさん可愛がってもらったからでした。

チ口はもう皆の家族でした。

「チ口や。もうすぐお前の腹巻が編み上がるからね。もう寒くないよ」

そういつて愛おしそうにチ口撫でると、チ口も甘えてクーンと鼻を鳴らします。

そんな穏やかで幸せな日々が過ぎていきました。

そんなある日、この施設に初めてやってきたおばあさんがいました。おばあさんは自分が置かれている状況が理解できずに、とても混乱していました。

「帰りたい。帰りたいよう」

と幼子のように繰り返して、泣きじゃくっています。

チ口はこのおばあさんをなんとか慰めたいと思って、じっと心配そうに見つめていました。

するとこのおばあさんは立ち上がって、職員さんの目を抜けて外に出て行ってしまいました。

そっちにいったらダメ！ 危ないよ

チロはおばあさんの服を啜えてなんとか、施設に連れて帰ろうと足を踏ん張りますが、仔犬の力では勝てません。

「きゃん、きゃん」

吠えて、誰かに知らせようと思いますが、誰も来てくれません。そうこうする間にも、おばあさんはどんどん車の多い通りに歩いていきます。

おばあさんは信号を無視して、ふらふらと車道に出てしまいました。そこに猛スピードで突っ込んでくる車がありました。

このおばあさんを助けたい

チロはそう思いました。

おばあさんの存在に気づいてもらうために、車に向かって走って行ったのです。

「きゃん」

悲痛に叫んでチロの小さな身体が、弓なりに宙に飛びました。

佐々木のおばあさんは、はっと顔をあげました。  
チロのための腹巻がようやく完成したのだけれど、なんだか胸騒ぎ

がして落ちつきません。

佐々木のおばあさんは、車椅子を左手で動かして事務所に行ってみました。

「ねえ、チロはどこだろう？ やっとチロの腹巻が完成したのだけれど」

「まあ上手にできましたね。チロさっきまでいたんですがけど、ほんとどこに行っちゃったんでしょう」

と事務の新田さんも首を傾げました。

「チロ！ チロや」

佐々木のおばあさんが名前を呼んでみますが、辺りはシンと静まり返ったままです。

耳を澄ますと、外がなにやら騒がしいようです。パトカーや救急車のサイレンの音が聞こえます。

「何かあったんでしょうかね」

新田さんが眉を顰めます。

「ねえ、新田さん。私も連れて行っておくれよ。なんだか嫌な予感がする」

新田さんが佐々木のおばあちゃんの車椅子を押して、通りに出てみるとたくさんの人だかりができていました。

その真ん中で、おばあさんが倒れていました。

「あつ、真田さん」

しかしおばあさんはどうやら無事な様子です。

その傍らに投げ出されたボロ雑巾のような塊がありました。

まっ白な雪に、抱かれるようにして横たわった小さな塊に、椿の紅い花弁が散ったような血の跡がありました。

「まさか、まさか……チロなのかい？」

チロはもう冷たくなって、固くなって、動きませんでした。

「ああ、ああ、チ口：チ口が死んでしまった」

佐々木のおばあさんは泣きました。

誰がどんな慰めの言葉を掛けても、決して泣きやもうとはしませんでした。

「チ口：チ口。お前の代わりに私が死ねばよかったんだ。ああ、可哀そうなチ口」

そんな佐々木のおばあさんの姿を見ると、みんな悲しくなつて、とうとうみんなであわあと声をあげて泣いてしまいました。

職員の大谷さんが小さな木箱にチ口の体を納めて、白い布をかけてやりました。

木田さんがそこにそつと野菊を入れてやりました。

それから皆に小さな蠟燭を渡して、部屋の電気を消しました。

蠟燭の炎はゆらゆらと揺らめき、皆の心を照らします。

「この炎はまるで、チ口みたいだねえ」

ひとりのおばあさんがぼつりと呟きました。

「真つ暗だった、私たちのこころの中を照らしてくれた優しい蠟燭の光」

ゆらゆらと揺れて、大きくなったり小さくなったりしながらおどけてみせて、蠟燭は輝き続けています。

ねえ、泣かないで

そういつて、蠟燭明かりが皆の心を慰めてくれているようでした。やがて蠟が溶けだし、その命を削りながらも一生懸命に皆を照らし

続けます。

それでもチロがいなくなってしまうのはとても悲しくて、皆の涙はなかなかとまらないのでした。

翌朝目覚めると、佐々木のおばあさんはもう泣くのをやめました。そしてその代わりに微笑もうと決心したのです。

涙で腫れた顔を洗い、洗面所の鏡に微笑んでみました。

「あら私の笑顔も捨てたもんじゃないわね」

そんな独り言を呟いてみます。

「そうですよ。佐々木さんはとっても笑顔が素敵なんですよ」

そういつて、いつの間にか職員の大谷さんが横に立っていました。

「やだ、聞いてたの？」

佐々木のおばあさんは、少し恥ずかしくなって顔が真っ赤になりました。

「佐々木さん。泣くのはもうやめにしたんですか？」

「そうよ。この笑顔はね、チロが私にプレゼントしてくれたのよ。」

チロは私たちの心の中で、ずっと生きてるんだもの。だからチロが私に残してくれたものまで無くしてしまったら、チロに申し訳ないわ。それにね、犬のチロは死んでしまったけれど、この世にチロはたくさんいるの。寒空に心を震わせている人全てが、チロなんだって気がついたわ」

そう言つて、佐々木のおばあさんはとても素敵に微笑んだのでした。「大谷さん。私はチロに出会う前とっても甘えていたんです。身体

が不自由でここに来て、私は世界で一番不幸なんだって思っていたんです。だけど小さなチロが教えてくれました。

私は決して不幸じゃないって。右手は使えないけれど、私にはとても素敵な左手があるって教えてくれたんです。この左手で素敵な腹巻だつて編むことができるんです。目が見えるんです。おしゃべりだつて出来るんです。耳も聞こえるから、誰かの話を聞いてあげることだってできるし、手を握って一緒に祈ってあげることだってできるんです。寒いと震えているチロをこの胸で抱きしめることができるって気がついたんですよ。生きているんじゃない。私は生かされているって気がついたんです。そうしたら心が嬉しくって嬉しくって仕方がないんです」

そう言つて、微笑んだ佐々木さんを大谷さんが抱きしめました。

「そうですか。それはよかったです」

なぜだか大谷さんの頬に熱い涙が伝っていました。

「嬉し泣きですからね」

大谷さんも泣きながら笑っていました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5904p/>

---

おばあさんとチロ

2010年12月23日20時52分発行